

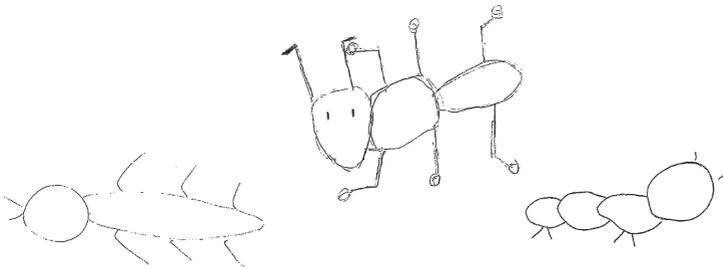
はじめに

私は沖縄県那覇市内にある小さな私立大学で、教員養成課程の学生たちに理科教育法を教えています。私の担当する授業の一つに、昆虫をテーマとしている選択授業があるのですが、その授業の中で毎年、学生たちに出す問題があります。それが「何も見ないでカッパの絵を描く」として、「何も見ないでアリの絵を描く」という問題です。カッパは想像上の妖怪です。つまり、学生たちの誰も、その姿を實際に見たことがありません。それなのに、カッパの絵は、皆がみな、それらしき姿を紙の上に描きます。一方、アリは、下手をすれば教室内にもうろうろしている身近な昆虫で、誰しもが見たことがあるはずなのですが、描かれた姿はいろいろです。将来、小学校の先生を目指している学生たちなのですが（そして、小学校3年生の理科には昆虫という単元があるのですが）、アリの姿を正確に思い描ける者はごく少数にすぎません。

カッパの場合、頭に皿があり、背中に甲羅があり……といった、いくつかの属性が学生皆の頭の中にはしまい込まれています。そのため、絵のウマいへたを別にすれば、その属性をとらえた姿を描くと、紙の上にカッパが姿を現すというわけです。一方、学生たちも小学生時代に、「昆虫は頭、胸、腹に分かれていて、脚は6本」ということを習っているはずなのですが、「アリが昆虫である」ということや、「アリの体のつくりは、昆虫の体のつくりの一般ルールにしたがっている」ということは頭に入っておらず、結果、「いろいろなアリ（らしきもの）」が紙の上に描かれるということになるわけです。

かくいう私も、昆虫について学校で習ったことはほとんどありません。大学時代の選択授業で、昆虫を専門とする非常勤講師の先生の授業が数時間ありましたが、内容は大学所在地の昆虫相の紹介が主でした。こんなふうに、大人になるまで昆虫のことを教わる機会がなく、身近な昆虫のことについても、知らないことばかりという人は少なくないのではないのでしょうか。そういう人たちにとって、気軽に手に取って読めるような昆虫の本が書けないかと声をかけてもらい、このような本を書いてみることにしました。もっとも、先に少し触れたように、私は昆虫について専門に学んだことはありません。私の昆

学生が描いたアリ



虫についての知識は独学で、その点、偏^{ひとへ}っている点も多いかもしれませんが。ただし、そんなふうの人にあって虫の見方には違いがあってもいい………とこの一つに含まれます。

ところで、私の担当する虫の選択授業を受講した学生の中に、重度の虫ギライの学生がいました(そうした学生が受講してくれたのがおもしろいことですが)。昆虫採集実習の際、彼女が涙^{なみだ}んでいるのを見て、後で話を聞くと、昆虫の中でもチョウのように翅^{はね}の大きなものが大の苦手^{にや}で、逆にゴキブリのように翅^{はね}が大きく広がって見えないものは大丈夫だということでした。虫ギライにもいろいろなタイプがあることを知ったのですが、もし、彼女のような虫ギライの人が、この本を手を取ってくださり、昆虫にもおもしろいことがあると思^{おも}うことがあれば望^{のぞ}外の喜^{よろこ}びです。

本書を書く際、できる限り、たぐさんの昆虫の絵を入れ、視覚的にも楽しめる本にしようと試みました。本書に描いてあるイラストは私が手掛けたものです。私は美術についても専門に学んだことはなく、イラストの描き方も独学です。小さなころから、生き物が好きで、絵を描くことが好きで、いつの間にかその二つが合わさって、生き物の絵を描くことが好きになったというわけです。先に書いたように、実際に見たことがあるはずのアリも、何も見ないで描^かこうとすると、思うように描けなかつたりします。私たちは、ものを見ているようで、細かなところまでは見ていないことが多いのです。ですから、昆虫のスケッチをするということは、新たな発見の連続と言えます。昆虫に限らないことですが、全ての生き物には、長い進化の歴史と、様々な他の生き物との関わりがあり、生き物の姿には、それらが反映されています。本書を開いて、ペラペラとページをめくり、気になるイラストに目がとまったところから本文を読んでいただくのも、一つの読み方ではないかと思^{おも}っています。

なお、本書を執筆するにあたっては、多数の文献^{ぶんけん}の手助けを受けました。本書を読んで、さらに昆虫に興味を持った方は、本書が参考にした文献^{ぶんけん}も手にされては………と思います。例えば近年『虫全史』(日経ナショナルシオグラフィック)や、『昆虫 驚異の科学』(河出書房新社)といった、美しいグラフィックと、最新の知見を盛り込んだ昆虫の百科全書^{ぜんしょ}とも呼^よべる本も出版されています。

盛口満

